

## 平成28年度 第2回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時 : 平成28年9月1日（木）18:00～20:00

場 所 : 川崎市役所第4庁舎4階 第6会議室

出席者 : 高木委員、田中委員、大下委員、金崎委員、杉村委員、金委員、齊藤委員、丸山委員、安部委員、佐藤委員、上杉委員

（事務局）渡邊教育長、西教育次長、小椋総務部長、佐藤担当理事（教育改革推進担当）、丹野教育環境整備推進室長、山田職員部長、小田嶋学校教育部長、石井中学校給食推進室長、金子生涯学習部長、芹澤担当理事（総合教育センター所長）古内企画課長ほか

欠席者 : 小松委員、門倉委員

傍聴者 : なし

司 会 : 古内企画課長

### 〔配布資料〕

資料1 : 学校図書館の充実に向けた取組 ～「読書のまち・かわさき」推進事業～

資料2 : 平成27年度学校司書配置モデル事業 学校司書配置による効果の検証

資料3 : 学校図書館の様子

資料4 : 学校における食育の推進について

資料5 : 平成28年度第1回川崎市教育改革推進会議の摘録

参考資料1 : 川崎市教育改革推進会議運営要綱

参考資料2 : 川崎市教育改革推進会議委員名簿

### 〔次第〕

#### 1 開会

#### 2 教育委員会あいさつ（教育長）

#### 3 議題（課題への対応について）

（1）学校図書館の充実に向けた取組について ……資料1、2、3

（2）学校における食育の推進について ……資料4

## 議題（課題への対応）

### （1）学校図書館の充実に向けた取組について

（中原区・教育担当課長説明）

委員 ・ 1つ目の質問としては、どんな方を学校司書として採用しているのか、また採用した後は研修等をどのように行っているのか、ということ。2つ目の質問は、資料2の中で、1校あたりの平均貸出冊数のグラフが掲載されているが、学校規模によって冊数の多少は違ってくるのではないかと思う。モデルとなった学校の規模は、他の学校と比較してどういう傾向にあるのか。

委員 ・ モデル校の学校規模については、昨年度の児童数で計算したところ、モデル校の平均児童数（683名）は全市の平均児童数（635名）と同等であるため、規模は、他の学

校と同程度であるといえる。なお、学校規模の影響を受けずに正確に貸出冊数を比較するためには、児童一人当たりの貸出数を計算したほうが良いのではと思う。

事務局 ・学校司書の採用にあたっては、校長先生からの推薦を受けて採用している。推薦される方は、長期にわたって図書ボランティアに携わってきた方や地域の元教員で図書に精通している方、元学校図書館コーディネーターの方など、学校によって様々である。司書資格の有無なども含め、様々な状況の下で検証を進めている。学校司書への研修は年4回行っており、総括学校司書に対する年6回の研修のうち4回を一緒に受講している状況である。なお、司書資格の取得を積極的に推奨しているものではないが、資格取得の案内は行っている。

委員 ・学校司書がいなければ図書館が開けられない、という状況はどういうことなのか。また、ある小学校では、辞書や図鑑といった調べ学習のための本が手に取りづらい場所にあるなど、図書館に人がいなければ調べ学習のための活用ができない状況になっているようだ。学校司書の配置によって、蔵書の管理や配置などの工夫ができ、より学校図書館が活用されるのであれば、非常に喜ばしいことである。

・図書ボランティアの方々は優秀で意欲のある方が沢山いる。図書ボランティアの活用をより一層進めると良いのではないか。

委員 ・司書教諭は学級担任を持っている教諭が任命されるため、授業時間中に図書室を開館することが難しいという実情がある。そういう状況を少しでも解消するために、川崎市では、学校司書配置のモデル事業を始めたということ。学校司書を配置した学校では、どのような効果があがっているのか、またどのような支援を行っているのか、具体的に教えて欲しい。

委員 ・先日、モデル校になっている学校を訪問してみたところ、多くの児童が担任教員と図書室を訪れて調べ学習をしていた。また、職業体験の一種として中学生も受け入れており、小中連携も進められていることを感じた。自分が図書館に滞在したのは1時間程度だったが、図書館を訪れる子どもをみると、皆が明るく自由な時間を過ごすことができていると思う。また、学校司書の働きかけで、殆どのクラスで朝の読み聞かせの時間ができていると聞いた。

委員 ・現在、次期学習指導要領が作られているが、読書活動の充実ということも盛り込まれる見込みなので、今後、学校図書館との連携や読み聞かせの実施などが一層大切になるのではないかと思う。

委員 ・今年度のモデル校はどの学校なのか。

事務局 ・川崎区が、新町小学校と川中島小学校。幸区が、西御幸小学校と日吉小学校。中原区が、大谷戸小学校と下沼部小学校。高津区が、子母口小学校と西梶ヶ谷小学校。宮前区が、菅生小学校と宮崎台小学校。多摩区が、三田小学校と南菅小学校。麻生区が、千代ヶ丘小学校と真福寺小学校。以上の14校をモデル校として指定している。

委員 ・中学校に学校司書を配置する予定はあるのか。

事務局 ・将来的には、中学校には総括学校司書を配置し、小学校には学校司書を配置するということを考えている。現在は、小学校における学校司書の配置モデル事業の効果を検証しているところであり、今後、中学校に総括学校司書をモデル配置するということも考えられる。

委員 ・中学校への配置もぜひ進めて欲しい。総括学校司書（元学校図書館コーディネーター）の配置事業開始から今年で13年経っているが、人数が21名ということで、もう少し

増えてもいいのではないかと感じている。モデル配置の効果の検証を行い、増員に向けて進めてもらえるとありがたい。

委員 ・読書のまちかわさき事業に関して、先ほど事務局からも話があったとおり、川崎ではかねてから図書ボランティアを意識して育ててきたという経緯があり、意欲の高い人や資質の高い人が育成されている。こういった長年の地道な努力があり、現在の学校図書館の活用に結びついているが、今後は、学校司書の配置によって、読書のまちかわさき事業を飛躍的に進められると思うので、配置の効果をしっかりアピールして欲しい。

委員 ・資料2において、学校司書の配置日数が足りないという課題があげられているが、どの程度不足しているのか。

事務局 ・学習指導要領では、教科の授業時間を年間35週と規定されている。学校司書は、年間150回の配置が可能であるので、単純計算すると週4日配置できて、かつ10回分余剰が出る。しかし、1回の配置時間は3時間であるため、1日あたり午前中又は午後のみ配置になり、学習支援が十分に行えないという状況がある。ただし、学校行事など学校図書館をあまり活用していない時期もあるため、各学校で上手くやりくりすれば、終日配置することも可能になる。まずは150回、1回3時間ということでモデル事業を行ってみて、どの程度の時間が必要なのかを含めて検証を進めている。

委員 ・前回の議論で、各区の図書館と学校図書館の連携について触れられていたが、学校司書が配置されることによって、両者の連携に変化などはあったのか。

事務局 ・公立図書館と学校図書館との連携については、図書館職員と学校教員、また総括学校司書が同席する会議を通じて連携を進めている。学校司書は現在モデル実施中なのでこの会議には同席していないが、今後は、この会議にも同席するなど、連携を深めていければと考えている。また、川崎市では公立図書館と学校図書館とをネットワークでつないだ図書館総合システムを構築しており、蔵書の管理や貸出数などの統計を、公立図書館で一括して行っている。学校司書にもシステムにアクセスする権限を与えており、システムを活用して学校図書館の運営を行うことが可能である。

委員 ・良い仕組みが構築されつつあるのを感じている。モデル校数が増えると、学校司書の資質の向上という課題も出てくるだろうが、大変良い取組なので、充実する方向で進めていけると良い。

## (2)学校における食育の推進について

(健康教育課担当課長、中学校給食推進室担当課長説明)

委員 ・中学校完全給食の実施に際しては、各中学校において事務局から丁寧にヒアリングを行ってもらっている。事業が実施されて初めて浮かんでくる課題もあるだろうから、実施して終わりというのではなく、実施後も引き続き、事務局からきめ細かく支援してもらえたら良いと思う。

委員 ・中学校での完全給食の値段(290円)は、他都市と比較して安いのか、高いのか。

事務局 ・他都市における値段は、大体290円から320円程度、自治体によっては340円というところもあり、そこまで高い値段ではない。

委員 ・現在試行実施している東橘中学校で話を聞いてみると、実施から約8ヶ月が経って慣れてきているということであった。授業時間も、前に10分、後ろに5分ずらすことで対応しており、特段大変な思いをしているということはないようだった。また、生徒は小学校で給食の経験があるので大きな混乱は無く、教員も時間が経つに連れて慣れてきた

ということである。食べる量も一人ひとり違っているが、給食当番が個々にあわせて盛り付けの量を調整するなど、子ども同士で上手くやっているということであった。

委員 ・授業時間については、小学校が授業1時間あたり45分、中学校が授業1時間あたり50分ということで、5分のズレが生じている。そのため、中学校では昼休みが20分後ろ倒しになり、給食の時間と休み時間とをどう按分するかが課題である。東橘中学校では、授業時間をずらして対応をしているということで、給食に慣れてきている印象である。

委員 ・中学校においても、小学校と同様に教室で担任の先生と給食を食べるのか。また、単に「食べる」こと以外で、給食の時間を活用した食育というのはどう進めていくのか。

事務局 ・中学校でも小学校と同じく、教室で担任と給食を食べることを想定している。また、小学校でも同じであるが、給食の時間を活用して食事の際に相応しい会話を身に付けたり、また、その日の献立に関する知識や使っている食材を紹介して食べながら学ぶなど、担任の先生を通じて給食指導を行っていく。なお、中学生については、小学校のように担任が主導するだけでなく、生徒たち自身が、給食の時間をどう過ごすか考えて工夫をすることも重要なことだと考えている。

委員 ・各中学校に整備されているランチサービス用の配膳室は、今後どのように活用されるのか。

事務局 ・中学校においては、ほとんどの学校がセンター方式による完全給食なので、センターから届けられた給食を一時保管しておく場所が必要となる。そのため、ランチサービス用に整備された配膳室を拡張して給食の保管場所とするなど、学校によって様々な活用を図っている。

委員 ・「大好きな給食」ということで、自分で給食を作ったりできる仕組みもあつたらいいと思う。

・先ほど、給食を食べる量には個人差がある、という意見があつたが、中学校では部活もあり、小学校での個人差とはかなり違っているのではないかと思う。部活動をしている場合の栄養補給など、子どもたちが自分の生活を考えて、給食以外で何を食べればよいか、補食について自ら考えるということが必要なのではないか。

委員 ・生きる上で食事は最も大切なことである。いま意見のあつた補食のことなどは、学校だけでは対応できず、家庭との連携が必要である。中学校完全給食の実施を機会に、家庭と学校とが上手く連携していければよいと思う。

委員 ・子どもの眠気の状態について、日中眠気を感じている子どもが非常に多いことが気になりである。

・食育の目標に「食の自己管理ができる人間を育てる」とあるが、これは非常に大事なことだと思うので、ぜひ進めて欲しい。

委員 ・子どもの眠気については、家庭での生活状況や学校での授業内容など様々な要因があるため、様々な条件を調査してそれぞれクロス集計を行わなければ、実態が見えてこない。

・米飯給食の制度開始当初は、運搬容器について様々な課題があつたようである。川崎市では運搬容器についてはどうか。

事務局 ・二重保温食缶を使用する予定である。中学校給食では、食缶を使用して生徒が運搬するという形を予定している。

委員 ・資料4-6にあるとおり、子ども達からレシピを募集するなどの参画型の取組が進められるとよりよい事業になると思うので、ぜひこの方向で進めて欲しい。

・完全給食が始まった当初には、給食とお弁当を選択制にするという自治体もあるが、

川崎市ではどうか。

- 事務局 ・ 全員喫食なので、選択制ではない。
- 委員 ・ それぞれの保護者の考えで、添加物を食べない家庭や、食の安全性を気にする家庭もあると思うが、そういった家庭へはどのように対応するのか。
- 事務局 ・ 小学校においては、給食に使われている食材の放射能が不安であるという保護者の方がいる場合がある。食事に対して強い家庭の方針があるという場合には、その都度の状況に応じて食べるかどうかの判断をしてもらっている。中学校完全給食を試行している東橘中学校においても同様の考えで、基本は全員で同じ給食を食べている。
- 委員 ・ 小学校での給食について、子どもたちには洋食が人気で、和食は人気がない傾向があると聞いている。日本の伝統的な食文化を継承するという意味でも、子どもたちが好きになれるよう味付けを工夫するなどして、和食給食をなるべく進めていくということも重要ではないか。
- 委員 ・ 海外の給食と比較すると、日本の給食は非常に美味しいと思う。和食給食について、特に中学校では、和食や魚のときは残渣が多く出ると聞いている。今後事業を進めていく中で見えてくる課題もあると思うので、課題を乗り越えて頑張ってもらいたい。
- 委員 ・ 家庭との連携という点について、小学校のように学校だよりなどを活用して、保護者や家庭への周知を図ると良いのではないか。
- 委員 ・ 学校から保護者への情報提供は非常に大事なこと。学校のホームページにその日の給食の写真を載せるなども情報提供の方法として考えられるが、それによって教員の多忙化を引き起こしかねないため、学校における業務の適正化とも併せて考える必要があると思う。各家庭においては、中学校給食のおかげで弁当を作る必要がなくなったから食育は学校任せというのではなく、各家庭においても学校と連携して食育を進めていくことが最も大切なことである。